

藤井四段

市川浩

日本将棋連盟のプロ棋士、藤井聡太四段は現在十四歳、名古屋大學教育學部附屬中學校三年生にして、昨年十月プロ棋士四段として登場以來公式戦負なしの二十九連勝を達成、從來の記録神谷廣志八段の二十八連勝を更新す。既に五歳より祖母の與へける将棋を始め、八歳にしてアマ初段、十四歳にしてプロ棋士への登龍門、獎勵會にて規定の成績を達成、正規の棋士四段となれるは平成生れ初、且つ史上最年少と云々。かゝる天才少年の登場に報道過熱し、全國の将棋少年の數も倍增の趨勢なり。

近年将棋に限らず、スポーツ、藝術、藝能にても弱年にして世界的成績を擧ぐる例多し。その多くに共通するは、第一に練習の開始年齢が四五歳、或いは三歳と極めて早きこと、並びに第二良き指導者に恵まるゝことを擧ぐべし。

當に早期教育の成果とも思はるゝも、我が國に於ては例へば能の稽古は七歳（世阿彌…年來稽古）、かの學僧契沖は五歳にして母の與ふる百人一首を暗記し、十一歳にして佛門に入るなど、特に江戸時代には一般庶民が子供時代を寺子屋に學び、既に世界的にも極めて高き識字率を達成、その後の明治維新を成功に導きける歴史ありて、學問、藝能に關する早期教育の効果夙に認識あり。然るに最近は兒童の「發達段階」を最重視するゆゑにか、學習負擔輕減が叫ばれ、幼童は學びより遊びこそ重要なれとて、未學習の漢字を使用しつとて叱責のことさへあるに及び、ゆとり教育に至る。スポーツ、藝術の幼兒教育が成果を上ぐる一方、學問には寧ろ晩學を推奨するが如し。

但し吾單純に早期教育を禮讚せずは、第二の「良き指導者」に思ひを致すがゆゑにして、これ等の指導者幼き兒童を愛育のうちに、斯道修得の爲の嚴しき初步の修行を課し、兒童亦嬉々としてその修行に勵むを見る。之を考ふるに、今日の初等教育に不足するは、學習内容よりは寧ろ、かゝる修行の實踐にして、その指導者亦不足す。その對象科目こそ「國語」にして、即ち學問の基礎練習たる古典の素讀・誦誦なれ。幼少にして記憶量を高むるは一生の財産にして、殆どすべての兒童に恩恵あるべく、良き指導者の再養成急務なり。

反面かゝる兒童の能力開發は、特定分野に限らざる一般的知的資産をも得しむるに於て、今日的問題の可能性あり。嘗て共產主義的理想社會に於ける勞働と分配は、平等に働き、「能力に應じて」取ると言ひ、日本國憲法は、「國民は法律の定める所により、その「能力に應じて」、均しく教育を受ける權利を有する（第二十六條）」とす。即ち「能力」は唯一合法的格差要因なりき。されど「能力」に明確の定義無し。一般には天賦の、且つ本人の努力により獲得せるものと諒解すべく、而も其の開發の動機は「縁」に由ること多きは、これ物的資産と定義、運用に於て異らず。かくして高き能力獲得に欲望渦巻き、其の機會均等を求めて、近時發展著しき遺傳子知識を振り翳し、遂には「親の才能」をも管理對象とすべしとならむ。

人は親と國とを擇ぶ能はず。擇ぶ能はざるを愛して文化生ず。文化相傳へて人人たるを忘れば焉んぞ萬物の靈長たりえむ。

〈法文の引用は口語體のまま〉

（平成二十九年七月二十四日受附）